
盾の少女と剣の転生者、あとは謎の氷の仮面の人と魔王なひと

東風の遁走者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盾の少女と剣の転生者、あとは謎の氷の仮面の人と魔王なひと

【Nコード】

N5851V

【作者名】

東風の遁走者

【あらすじ】

正直転生とは書いてますがただの技量不足だから使ってるだけな感じ。

転生者は一人ですが召喚者、異世界人みたいなのも考えていたり。先のことはやりたいなって場面はあっても道はついてないので瞑想中主人公が空気でも気にしない
タイトルは適当なんで変更もあり。
書いてて文章の肉付けの未熟さに絶望中

転生者は自分憑き

世に神様って言うのが居るのならそいつの横暴は理不尽なのか不条理なのか考えたくなる。

それが運命のような意思のないものだったら不条理なんだろうけどいたらずでこんな状況にしたのなら理不尽なんだろう、そしてそいつにはしゃがんでからのアッパーカットと踵落しを御見舞いしてやりたい。

目覚めたときはそんなことを考えてた。

周囲は森、子供の遊び場として利用されている場所でそこに一人の少年が歩いている。

その道の先の木の上で同年代くらいの影が息を潜める、少年がその真下を通るあたりでその影は少年に飛び掛る。

少年はそれを何事もなかったかのように後ろに避けて頭に拳を振り下ろす。

皆さんこんにちわ、私『ジユキ』と申します、多分今の私は転生者というものです。

なぜ多分かというのは訳がありません、大抵の転生モノのとおり死ぬ前の記憶があったりするのですが、前回に比べて今の人生は世の中の見え方がおかしくなってるんですよ、いえ、大人から子供の視点に変わったからとかここが剣と魔法の世界だからとかそんな簡単なものじゃないはずですよ。

「ジユキ、おまえなんでそんなに不意打ちとかに強いんだよ？」

「ん〜？ 多分それはあれだね、僕は目が四つあるからさ」

「ははは、何だよそれ？まさか後ろにも目があるっていうのか？」

今私の目の前で木の棒を握って頭にたんこぶをつけたまま倒れる少年は私の言葉を冗談と受け取ったのか笑いながら立ち上がった体についた土を払い落とす。

これで何回目のお襲失敗だあ？とかいつてるけど数えてるの？いえ、ちがうんですよ、この体にとり憑くように私の斜め後ろに居る『自分の幽霊』で見渡せるからそういうのが見えるんですよ。

この自分の幽霊は私の周りを一定の距離までなら自由に動き回れる、触れないし物を突き通るけど物を持つように力を込めればちゃんと持てる、以前それとなくこの友人の目の前であっかんべーしたことがあるんだけど反応がなかったから多分他に人には見えてないんだと思う。

これって転生じゃなくて憑依な気もするんだけど物心ついたときにはこうなっていたから転生って表現しておいたほうがいいよね。

でも死後の世界ってのは魂の牢獄送りにされるモノだと思っただけこの分だといろんな世界を回る輪廻転生の教えっぼいね？

まあ、転生の過程で記憶を失うのなら輪廻だろうと牢獄だろうと消失と変わらないし、もとの人生から引き離されることに変わりはないんだからいいんだけどね。

最も、元の人生の死因を考えたら恥ずかしくて記憶を消して欲しいとすら思えるんだけど。

「ジユキ〜、ケイト〜、もう帰るぞ〜？」

「はいよ〜」「はい〜い」

っと、まあ自分の過去はともかく重要なのは今。

自分は今孤児院で生活している、肉体年齢は七歳といったところかな？

孤児院といっても現代世界での孤児院ではない、剣と魔法の世界、ファンタジー世界の孤児院で今は院長さんのカイガさんとその孫のミラ姉さん、後は孤児が自分を入れて15人くらいで暮らしている。

ミラ姉さんは魔術師の卵で、修了後は国仕えになることを条件に奨学金で隣の街の学校に通っている。

一週間・・・この世界では一年が十二ヶ月なのは変わらないけど言い方が違ったり、一週間が日月水風火土金の八日間になっていてそれが青赤白黒の四週で一月となっているので一年が前世のときよりも若干長い・・・の内二日間の休みに帰ってきて習ったこと等を少しだけ教えてくれる。

今日はその二日間の前日、赤の金の日なので太陽はまだ高いところにあるけど少し早めに孤児院に帰ることになった。

「昔々、この地は初め、神さまたちが平和が続く世界『楽園』を作る為に力を合わせて作られた世界の一つでした」

今日のお話は創世と大まかな歴史の話。

この世界はかつて古い神々が平和を夢見て作った箱庭のひとつで、いろんな生物の役割を始めから固定しておくことで環境を固定しようと試みたものだったらしい。

最も、種族の違いによる住み分けはある程度うまくいったものの役割については飛びぬけた才能の人が現れたりしたときに少しずつ歪みが出てきて崩壊した。

それでも世界は定められた役割を保とうとした結果いくつかの国に分かれたのが統合や分裂、滅亡を繰り返して出来たのが今の国々なんだそうだ。

世界によって役割を定める為に分けられた国々は平和とは程遠い形になる。

冷戦と激戦を行き来するようになって数年で大陸は疲弊し、たたかいを続けるのが難しくなってきた。

品種改良と薬で強化した強靱な獣を心を繋げて僕にして操る魔獣

使いの国「フェイレン」の首都で起きた『魔皇』という巨大生物の発生と、一夜にして起きたその国の滅び。

もう一つは極北の大地、精霊使いの国「ハーレント」に出現した魔族の侵略。

二つの災厄に対して各国はすぐに動いたけど元々戦線を維持するのが限界だった状態だったせいで歯が立たなかった。

この状況を打開する為に行われたのがハーレントの秘術である召喚術を大規模なものにして、より遠くから無作為に強い力をもつ存在を呼び出す『高次能力者召喚術』。

後に勇者召喚の儀式として有名になるこの儀式によって呼ばれた二人の少女は当時の代表と契約を交わして戦の最前線に立つことになる。

「はい、今日はここまでね？ みんな、今日はもう寝ましようっ？」

ミラ姉さんの言葉で今日は解散になる。

みんなはまだ話を聞きたくてブーブー言ってるようだけどもう寝ないと明日起きるのがつらくなるので仕方がなくみんな寝ることになった。

今日も平和な一日、これからも続けば良いなあ……

闇色の部屋の中で／城より出たものと物語を始める魔剣

「おや、早かったね」

暗闇に沈んだ部屋、決して溶けず火の消えない蠟燭のみが光源となるその部屋で大柄な鎧が巨大な玉座に座っている。

その声は鎧の見た目に合わず子供のように高い。

その前には顔全体を隠す目の部分だけに穴がある丸い仮面、そしてそれを被る男の姿が在った。

仮面には固定する為の紐等は付いていない、《氷で出来た仮面》がそのまま肉に食い込むように張り付いている。

「いや、少し待たせすぎたよ、ここの法則は聞いてはいたけどなかなか厄介だね」

「分かってなければ、厄介と思うことなくただ、世の中を理不尽だと思っただけさ、それが不条理の間違い、だと気づけずにね」

「それがこの世界の常識ってところかな？」

「そうだね、でもそれを押しのけて、短期間であの組織を創った、君の力もなかなかのものだよ？ 流石、彼女が信頼するだけあるね」
「そうかな？ でも僕はあの中では序列は低いんだけどね」

それを語る男の目にはそれを悲観するような色はない、それが常識だといわんばかりに自分は弱いほうだと告げる。

「弱い？ 君が弱い、というのならこの世の人間も、魔族も、エルフもドワーフも、竜族だって弱いということになるぞ？それはこの世界に対する侮辱だ、気をつける」

「っと、それは申し訳が立たないね？ ところでなんで君はハルバードを構えてるのかな？」

「なに、注意ついでの罰、ついでに我わたしの気分転換に手合わせ、とな
」？」

そういう鎧は玉座から立ち上がってその横にあるハルバード、刃の部分の長さからこれは巨大な片刃の長剣に分類してもよさそう
ただしこの斧の刃は何故か両刃だ　なそれを中ほどで持つてだ
らりとぶら下げるようにし、自由な左手を暗く光らせている。

鎧から出てくる嬉々揚々としたオーラは『逃がさない』とでもいうのだろうか？　男は何も感じないかのように嫌そうに見ているが
二人の居る部屋は鎧から発する圧力で揺れている。

周囲を見渡してそれを見た男は一つため息をついて右手の手袋を
突き出し、その甲の部分にある三つの氷を輝かせた。　手合わせに
付き合おうと決めた今でもその瞳に戦意のようなものはなくむしる無
気力さが目立つ。

「それじゃ名乗り上げからいこうかな？　多業務創作工場『ミスリ
ル』の　」

その名は告げられる前に戦いは始まった。

その戦い　いや、戯れは一時間ほどで収まった。

戯れの場となった部屋自体には被害はない、ただしその表面は余
すことなく氷が張り付いている。

「やはり、君が弱い、というのはいえんだらう？　この非常識
「いやいや、これで工場で戦える人としては弱いつて言うんだから
世の中怖い」

「怖いのは、その工場とやらだ」

右手の指先でコマのように正八面体の氷を回す男の体にも不満げにため息をつく鎧の体にも怪我はない、ただし鎧のほうには全身にびっしりと氷を貼り付けた状態なので動きにくそうではあったが。

「まあ、これで十分でしょう?」

「確かに、十二分には動いたが、何故だ? いつもならもっとやっているはずなのだが?」

「それはまあ、僕の技能で秘密な部分だから聞かないでくれるかな?」

「そうか、それならいいのだが……ところで、アレはもう彼女に渡したのか?」

やる気を削がれた鎧はいまさらのように本題を聞こうとする、これは本来手合せの前におかないといけないやり取りのはずだ。

「まあ、モノはギルドに強制の指名依頼で預けておいたから、明日くらいには不機嫌になって旅に出てる彼女が見れるんじゃないかな?」

「っは!! それはまたずいぶんと、理不尽なルールがあったものだな? いいのかい? これではまるで職権乱用だよ? 下々の眼には君は一体どんな風に見えるのだろうなあ?」

先程とはうって変わって上機嫌な様子でなじるように鎧は聞いてくる。

その身には既に纏わり付いていた氷はない、溶けたわけではなく初めからなかったかのように消えうせていた。

「権利は使わないなら枷になるだけだよ、そのためだけに今の地位

を築き上げたんだから」

「ふむ、それもそうか……この計画、うまく行ってくれば良いものだが」

「うまくいってくれなくても困るのは君たちだしね？ 僕には関係ないかな」

「ふむ、つれないなあ、それでは女にもてないぞ？」

「これ以上誰かに纏わり付かれるのも面倒なんで、こっちからお断りだよ」

この計画は鎧が治めている国の行く先を決める重要なもの。

事の結果によっては世界が一転するモノなのだが男はそれにすら興味は無いようで、まるで他人事のような態度を貫く。

「おまえ……本当に男か？ それともあっちの趣味があるんじゃないだろうな？」

「それは無い、ただ単に付き合う女性が居なくても十分に間に合ってるだけ、かな？」

「冗談の通じないやつだな……」

その後、男は現在の進み具合とこれからの予定の詳細を鎧に伝えるところ次の仕事があると言って鎧に背を向ける。

「また、暇なときにでも来い、君はいつもいきなりだから、もてなす事は難しいが、茶ぐらいは出そうとは思っぞ？」

「いつもそういってるけど、未だに一度も出されたことは無いよね？ 『魔王様』？」

それではまた、と男が言つと鎧は視界がガラスのように碎ける錯覚を起こし、気が付けばすでに男が居ないことに気付く。

君も、いつもこうだな。と考える鎧の居る部屋は男が来る前と変わらぬ風景を描いていた。

* * *

眩いばかりに輝く太陽と雲ひとつ無い青い空の下、石造りの街並みの中で少女はその清々しさを殺さんばかりの憤りを撒き散らして地団太を踏んでいた。

「なんで私が強制労働なんて不名誉なことしなくちゃいけないのよ！！！！」

その理由は『ギルド』と呼ばれる、頼みごとを持つ人とそれを解決する人たちの仲を取り持つ管制業務を主に、その補助に必要が在ったり無かったりする複数の仕事を無節操に組み合わせた店から直接仕事を押し付けられたからだだった。

ギルドでは本来、依頼する側が示した情報をギルドの登録者がある程度自由に選んで解決するという方式を取っている。

しかしそれにも例外があり、ギルドが個人を指定して強制的に依頼を実行させる事がある。

これは自由に選択できる弊害として、過酷過ぎる条件だったり、単純作業な為に敬遠されたり、単純に割に合わなかったりする依頼は長期間放置される事からその対策として作られた制度なのだがこういうものの対象となるのは借金を返済できなかつたり、ギルド内で禁則事項に当たる行動をした人で、借金のかたや懲罰として適用される。

時々好き好んで強制労働をしたいと言ってくる特殊な人もいるがこれは既に強制ではないので割愛しておく。

これを拒否するとギルド内の様々なサービスや店を利用できなくなる上に掲示板に張られるような依頼は受けられなくなり、登録制

度による個人保証がなくなるので不審者として扱われるようになる。そんなわけで強制労働をしなければいけないということは不名誉な何かをしてしまったということに繋がりが易いのでそれ自体が不名誉なことと一般では認識されている。

「私にはそんなことをしなきゃいけないようなことはしてないって言うのにー!」

この少女もこの一般からずれた認識を持っているわけではないのでこの状況は謂れのない罪を被せられたのと変わらないのであった。

「しかし、ミラ様、この依頼はどうやらそのギルドから直接出されているもののようにですよ?」

「っ!」 シャウト、その名前で呼ばないでっって言ってるでしょ! 私はこちらではシャムだって何度言ったら分かるのよ!」

後ろに付き従う従者らしき男性が不思議な点を指摘しようとする。と少女は周囲に聞かれてはいけない名前を使われて激昂する。

幸い、少女 シャムの名前は先程から彼女が怒りを撒き散らしていた為に周りには従者らしき男性 シャウトしか居らず、その名前を知っている者以外には聞こえていなかった。

「シャウト? 本来なら私はここにいないことすらあっちゃいけないの、城から出てくる時にした約束を守れないのなら帰って!」

シャウトにとってはそもそもシャムに城に戻って欲しいというのが本音なのだが、彼女の母親からある程度自由にさせて世の中を見て欲しいと頼まれてる手前でそのようなことは言えない。

「はあ……分かりました、シャム様、それで、この依頼はどうなさ

るのですか？」

「決まってるでしょ、強制になってる以上は受けるしかないじゃない？」

シヤムもシャウトに少し当たって気が紛れたのか嫌そうにしながらもギルドに向かう事にした。

ギルドは街の大通りの中程、見栄えが悪いと大通りから外された行商人や旅人の為の商業区画を繋ぐ形で一画を占拠している。

これは旅人との接触を嫌う依頼者が大通りの側から入って依頼する一方で登録者は旅人が多いために商業区画で活動することが主なので両方に入り口が必要だった為だ。

その都合で無駄に広く土地を持っているギルドの内部は宿泊所や自衛具屋、貸し倉庫、銀行に書庫など、本来の役割が何なのか分からなくなっている程に副業が混ぜ込まれている。

当然ここまで詰め込まれているのはこの街が国の中でも有数の大きさを誇っているため、この国の支店としては一番の大きさを誇る。ちなみにだが首都にある『シルト国本店』はここよりも遥かに小さい規模なので実質この支店がこの国の登録者にとっての本店となっている。

「依頼内容の確認をしたいのですが、こちらでいいのでしょうか？」

シヤムは依頼受付のカウンターに登録認証代わりに宝玉を渡しながら強制労働の詳細を聞く。

受付担当の女性は何かやらかしたとは思えない少女から依頼の確認と聞いて一瞬目を丸くしたが、依頼内容を見るとああ、この人のか、とため息をつきながらそれに応えた。

「ああ、この方の依頼ですね？ 依頼内容は品物の配達と受取人の見極めです、配達する品は貸し倉庫に保管されていますのでこの札を持って行ってください」

受取人の見極めと聞いてシャムは眉をしかめた。

「受取人は決まってるの？」

「えっと……はい、どうやら隣街の近くに住んでいるという情報だけで詳細はかかれていません、これが周辺地図です」

確かこのあたりは友人が週に一度帰ってる場所

「ありがとうございます、この地図は貰ってもいいですか？」

「はい、構いません」

場所を確認したシャムは地図と品物の引き換えの札を受け取ると貸し倉庫で預かってもらっていたものと依頼の品を受け取る。

依頼の品は剣だった、大きさからみてツヴァイハンダーのようで、鞘の代わりに何重にも布を巻かれ、その上に金属のツタのようなものが刃をしまうように絡み付いている。

ツタはガードの部分にも絡み付いていて外せ無いようになっていて、どうやって取り付けたのか不思議なものだ。

それはこの国『シルト』の祝福である魔術操作を生業とする魔術師が使う魔具よりも、異端者となって辺境に追い出された者達の国『カンシ』にある魔導具や、狩った獲物を素材として道具を作る『アイソルト』の憑具に近いものでいわゆる、『呪われた品』のようだった。

それを見たシャウトはこの剣に潜む『何か』に恐怖した。

シャムの顔を窺うと彼女も息を呑んでいることから剣に何かを感じているようだ。

「この依頼、強く問いただして無効に取り消してもらうわけにはいかないでしょうか？」

「いいえ、まさかここまで曰くがありそうな品とは思わなかったけどむしる興味がわいたわ、この依頼はしっかり受けることにするわよ」

「しかし「シャウト」……分かりました、しかしこれほどの品です、何があるかわかりませんので十分に気をつけてください」
「分かってくれればいいのよ」

ギルドを出た二人は剣をロープで縛ってできるだけ触れないように荷物にくくりつけてから友人が通っているであろう学校のある街へ歩を進めた。

王女の影武者

私はミラ、将来国仕え 王女の侍女と影武者となる条件で国から援助を受けている魔術師の卵です。

正確には影武者としての役割を既に受けていて、世間に全く姿を見せず現在行方不明となっている王女の代わりとしてこの王立魔法研究学園付属統合学院に通っています。

孤児院の資金援助と御給料までもらっている身としては異論は無いのですが、なぜ私なのか？ という疑問はつきないです。

「ミラ・ケイサルス？ ミラ・ケイサルス！！ 聞いているのですか！！」

っは！！ いけないいけない、今は授業の最中だったんだ、王女の代わりである以上は目を付けられるような真似は出来ない。

「すみませんレミス先生、少し考え事をしていて聞いていませんでした」

偽の王女の身分とはいえ、ここは身分無用のこの学院なのでこういうときは素直に謝ります。

「今日は復習ですからまあ良いでしょう、では国の祝福と力の特性属性について答えなさい」

今回の授業の内容は覚えていますのですぐにその場で立って答えることにします。

「はい、国の祝福とは……」

国の祝福とはこの箱庭の世界の基礎となった『固定された役割』の法則が崩壊して国という形に変わった時にそれを維持する為に世界が国単位で別々の補助をし始めたのが起源と言われています。

国がつくられた時に補助がつくのではなく特定の集団が世界に国と認められて補助が付いた時に初めて各国がそこを国と認めるようになったので『世界が国と認めた祝福』とされています。

現在その祝福と認められているのは

神聖国家『ケイサル』の『癒しの詩』

魔術の国『シルト』の『魔術操作』

機械の国『キリト』の『機体操作』

魔導機の国『カンシ』の『魔導機精製』

剣の国『フェルノーグ』の『剣気収束』

闘士の国『ファルキア』の『闘気爆裂』

魔物憑きの国『アイソルト』の『憑依疎通』

森の国『エステイマ』の『彫器の民』

火山の国『ノーグ』の『冶金の民』

海賊の国『ハラソ』の『無力化』

です。

そのほかに詳細は隠されていますが祝福されているとされているのが、鎖国『火心』、竜の国『ニーズヘグ』の二ヶ国があります。あとは今は亡き魔物使いの国『フェイレン』と精霊国家『ハーレント』にも祝福があったとされていますが現在は確認できていません。

属性は、地・水・火・風・金・時・空を基本とした特性です。

そのうち風・火・水・地はこの世界を構成する物質を司り、金は切断・接続を司ります。

時は力と呼ばれるもの全般を統合したものを司り、強い力の持ち主は空以外の全ての特性を自在に操ることすら出来るとされています。

空は場を司り、時とは逆に本来力と呼べるものは無いとすら言われますがその特殊性から他の属性ではできないことが出来るとされています。

この二つは対となって上位属性と呼ばれることもあり、一般ではそれぞれ『光』と『闇』と呼ばれています。

「以上でよろしいでしょうか？」

「はい、少々蛇足もありましたが良く出来ましたね、座ってよろしいです」

……ふう、危ないところでしたね。

レミス先生は多少の前後の変動は有りますけど全員に一度答えさせるまでは同じ人には当てないから当分は安心です。

先程の二つの話はあくまで基本であって何事にも例外はある。

祝福は実は国でなくてもある一定以上の組織であれば認められる可能性がある、ギルドはその例外の一つで『冒険者』と呼ばれる異

質な祝福が得られるそうです。

属性も時と空より更に知られていない基本として思考を司る『心』と生命そのものを司る『命』が存在していて、更に派生属性と呼ばれる司る対象の無い属性と、希少属性と呼ばれる未だに存在を認められていないものがあるそうです。

この前義弟達にこの話を聞かせたら一人だけ考え込んでいたようだからあの子にもう少し詳しく教えてみるのも良いかも知れないわね。

この国の祝福は魔術を扱う素質の高い人にしか作用しないので魔術を使える人と使えない人では扱いに大きな差が出てくる。

この国では王族と貴族が国を治めていて、どちらも魔術師の素質の高い人が多いので『魔術師』貴族』という一般論が出来ている。

それに魔術の素質は血統が影響するらしくて祝福が作用するくらいの人か親族にいない限りはまずそれだけの素質がある人は生まれない。

私のような例は本当に数が少ないそうです。

……そういえば、その少ない例の一人である友人はどんな魔術を使うのか聞いたことが無かったですね、今度会うときに聞いてみましょうか。

授業もそろそろ終わりかな？といったところで一匹の猫が教室に入ってきて教壇に登ってきた。

あの猫は？

周りの人も同じように疑問に思っているのかみんなレミス先生と話している猫を見つめている。

さて？ どこかで見たことがあるような……？ とか思っている
とレミス先生の目がこちらに向けられる。

「ミラ・ケイサルス、学長からお話があるそうです、学長室へ向かいなさい」

ああ！！ そうだ、学長の使い魔だ！！ ということは今のは学長と話してたのでしょうか？

「分かりました」

* * *

「とは言ったものの……」

歩き慣れたはずの学院内……のはずなのに。

「学長室どこですかあゝゝ！！」

現在絶賛迷子中になっています。

まさか五年以上過ごして来た学び舎で迷うとは思いませんでした。

そういえば学長室って入学したあたりに先生に連れられて入って以来言ったことなかったなあ。

などと現実逃避をしても学長室は見つからないですね、そして現在地も分かりません。

窓の外を見てみると今日は快晴だったはずなのに空は曇っていて、向こう側の壁の窓にも人がない。

「回廊空間にでも迷い込んだのかしら？」

この学院は一部空間が弄ってあるので地図に描けないような形に

なっています。

緊急時にはそのバランスを崩して閉鎖することで被害を少なくするようにしていて、それは火事や地震等の天災だけではなく侵入者が現れたときにも機能する防犯装置の役割も果たしているので、たまたま教室を抜け出した生徒がこの空間に捕まって先生がたに説教をくらうことがあります。

もしかしてまだ許可が下りていないうちに出てきて捕まったのでしょうか？

そんな風に悩んでいると

「王女殿下！！お覚悟を！！！」

廊下の角から教員服を着た男が出てきた。

教員服は着ているけど剣なんて使っているのだから魔術師ではないようで、一人まっすぐこちらに走ってくる。

この国の魔術は正確には唱歌魔術と呼ばれている程詠唱が長いのが特徴で、護衛が居ない時には隙が大きすぎる問題がある。

唱える前に終わらせてしまおうとした男の突撃は……見えない壁にぶつかって弾かれた。

「ここに来てから何回目の襲撃だったかしら？」

男が弾かれたのを確認してから私は詠唱に入る。

「地よ風に、混ぜられ、その結束と流動を以てかの者を閉じ込めよ
ケージ」

空気中の埃や塵などが男達の周りに集まり、檻のように固まる、それを更に建物を構成する物質で補強して閉じこめる。

男は檻を剣で切ろうとするけど刃は檻をすり抜けてぼろぼろになる。

「今回はまた急ですけど、一体なにが理由なんでしょうか？」

一応聞いては見たけど男達は答えない、ただ殺せと一言だけ言う。

「一応言っておきますけど、たとえ私を殺したところで国には何の損失も無いんですよ、むしろ要らない負担が減ったと城の毒虫達は喜ぶんじゃないですか？」

これには少し反応があった、王女が死んでも損失が無いなんてのはおかしいもんね。

「口を閉ざすのもいいですけど、良いんですか？ 目的を果たせない以上は言ってもかわらないですよ？」

これは最後通告、私も学長室に行かなきゃならないんだからこれ以上は構ってられない。

「二度は言わん」

グシヤリ

男が答えを言い終わると私は檻を中身ごと潰した。

檻の中は砂嵐のように流動してるから潰された中身は直に固体か液体か判別できないほどに磨り潰されて、存在を証明できるのは岩の隙間から滲み出る赤い液体だけになるでしょう。

その様を見ていたくない私はそれを地下に潜らせて、先程より少しさめた気持ちで学長室を探すことにした。

* * *

程なくして回廊が解除されたのか学長室が見つかった。

扉を四度ノックして返答を待つと中から「どうぞ」と女の人の声がしたので「失礼します」と断つて入ることにする。

「久しぶりね、ミラ？ 調子はどうかしら？」

「シャムさん！？ いつここに来たんですか！！」

入った先では学長が待つているとだけ思っていた私は見覚えのある顔が居るとは全く考えていなかったのでいきなりの友人の挨拶に驚いてしまう。

応接用の椅子には友人のシャムが座っていて、その後ろには彼女に付いている男性 シャウトさんが立っていた。

「さつき着いたところよ、ちょっと貴女に手伝ってもらいたいというか、連れてって欲しいところがあったのよ」

連れて行って欲しい場所？ 私が知っててシャムさんが分からない場所なんて早々無いと思うのにな？

彼女の反対側の席に座った私が首を傾げているとシャウトさんが補足してくれた。

「今シャム様が受けている依頼の品の受取人がどうやら毎週ミラ様の向かわれる孤児院の近くに居るようなのです」

なるほど、それなら私が一緒に行った方が間違いがないですね。見せてもらった地図も確かに私の住む孤児院を指していたので、多分お爺ちゃんあたりが受取人なんでしょう。

* * *

目をぐるぐるに回して　パタリと倒れた彼女をワタシは抱きとめる。

ああもつ、可愛いわね、食べちゃいたい位に

そんなことを考えてる私にこの国の王女様は不機嫌そうな顔でこちらをにらむ。

「女の子がそういう顔で人をにらむものじゃないですよ、王女様？」

そんな風にからかうと彼女の顔は一生険しくなる。

「なんで私がこの国の王女だって教えたのよ？　期限は十分にあるんだし、次の週末に一緒に行っても良かったのに」

「あら？　これでも親切心でいったのよ？　貴女、まさかこの娘が城に仕えるまで隠すつもりだったの？」

凶星だったのか彼女の顔は苦虫をかみ潰したような苦い顔に変わる。

彼女の百面相も可愛くていいわね？　なんて考えながら、私は腕の中でまだうんうん唸ってる娘をひざの上に乗せて抱きしめなおすようにこの娘の座っていた椅子に座った。

「……出来ればずっと友達のままに居たかったのに」

「この娘がこの程度で離れていくと思ってるの？　意外と臆病なのね？」

「貴女にはわかんないわよ、学長」

長い沈黙の後にポツリとつぶやいた彼女の言葉は友達の居ないさびしがりな女の子のようだった。

でも、この娘は貴方がそう望めば王女だなんて関係無しにちゃんと接してくれるわよ、じゃ無かったら影武者の仕事の中にあんな態度は取れないはずだしね。

「これからどう接したいのかは貴女が決めなさい、もし城でこうなつてたら貴女もこの娘もそういう役割と決め込んじゃうでしょ？」

彼女はまだ納得しては居ないようだけど考えるところはあるみたいだし、このあたりにしておこうかしらね。

「そうね、ちよつとミラの部屋で考えてみるわ、それじゃちよつと失礼するわね」

少しすっきりした顔の彼女は私の腕の中でちよつと落ち着いた娘をひったくる。

「あら、もう少しゆっくりしててもいいのに」

「貴女の腕の中に彼女を置いとくと何されるか分かったものじゃないから落ち着かないわ」

「あら、信用が無いわね、ちゃんとやさしくするわよ？」

「それを危惧してるのよ！！」

彼女は鳥肌を立たせながら友人をお姫さま抱っこででていく、いわね、お姫様抱っこも。

その視線を感じ取ったのか彼女の付き人もなんだか彼女達を隠すように付いて出て行った。

若いっていいいわねえ…… 私はそんなことを考えながら回廊空間

からこの部屋に繋がる扉を消して仕事に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5851v/>

盾の少女と剣の転生者、あとは謎の氷の仮面の人と魔王なひと

2011年11月16日12時17分発行